資料渉猟余話

その58

日本画家　松林桂月と飯田（前）

鎌倉　貞男

先頃、本欄に追悼文集『啓助』（昭和27年刊）のことが掲載された。当該冊子に、標題の松林桂月画伯の悔み状が載っていることを知り、遭難者のご令兄、小島嘉七（淑男）氏をお訪ねした。出征時、桂月宅を訪問し、揮毫もしてもらったという氏は、卒寿を越えて尚ご壮健で、割烹「松楽」の主人として活躍されている。

松林桂月（篤　一八七六～一九六三）は、戦前に帝室技芸員や帝国芸術院会員となり、戦後、文化勲章を受章した日本画家である。晩年に日本南画院会長となった桂月は、文展・帝展・日展等を中心に活動し、日本南画を近代日本画として確立した南画家と言われる。

私は、この桂月が飯田と関係のあることは前から聞いていたが、小島氏のお話を伺って予想以上に強く、深い関わりのあることを知った。その象徴が、次に示す先代嘉七に宛てた飯田大火の見舞い状である。

拝啓　御地の大火、新聞にて拝承。近来稀に見る惨状、実に驚き申（し）候。松尾町も焼失の中に入り居（り）候に付き、無論、御罹災の御事と拝察候。従（っ）て、御怪我の有無心配に不堪。何卒、御一統様御無事の程、蔭ながら御祈り致（し）居（り）申（し）候。不取敢御見舞まで。草々如此

不具

四月二十二日　篤

小嶋（ママ）嘉七様

（句読点等筆者）

これは、封筒の消印にも明らかな通り、桂月が飯田大火の翌々日に速達便で送った手紙である。古希を迎えていた桂月が、新聞で飯田の大火を知り、心配のあまり早速筆を執ったのであろう。

手紙を送られた小島嘉七こと寛一（一八九六～一九八二）は、淑男氏の父君である。当時、松尾町で手広く元結商を営んでいた寛一は、長期にわたって桂月と親交があった。聞けば、その小島家も飯田大火で罹災し、家も蔵も焼けてしまったので、桂月の作品をはじめ全て焼失してしまったという。

この数年後、大火で灰燼に帰した飯田も次第に復興が進み、新しい家や街が立ち並ぶ中、小島家も立派に新築された。その小島家を老境に入った桂月が訪れた。大火前の飯田を知る桂月は、どんな思いで新しい飯田を見たであろうか。

その折、桂月は、宮ノ前に新築された寛一の隠居所に招かれた。そこで画伯は筆を執り、別掲の五字の対句を書いた。

山静如太古　山静かにして太古の如し

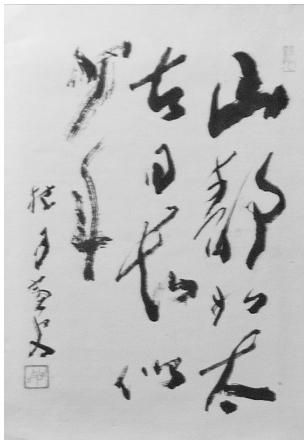
日長似少年　日長くして少年に似たり

更に桂月は、この対句に寄せて、その家を「日長庵」と命名し、渇筆で揮毫して去った。

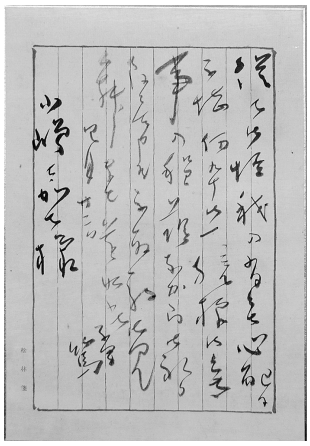
後年、淑男氏のご子息嘉治氏が、阿智村の昼神温泉にホテルを建てて経営されることになった。このホテルこそ現在の「日長庵桂月」である。以上の由来を物語るように、右の書や額は、同ホテルのフロントに掲示されている。

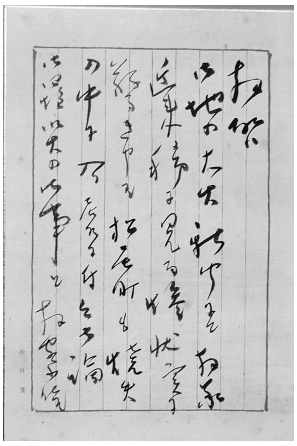
そんなわけで、松林桂月画伯の令名と事績は、その作品と共に今なお生き続けている。

（故人敬称略）



日長庵で揮毫した五字対句





桂月から送られた飯田大火の見舞状